城北中学校区

願竜寺に伝わる伝説

先祖田村彦四郎俊行は桑原の一族を連れて越前福井より北陸道をへて、柿崎より山を越え、細越将監の縁故をたどって、小村峠に一夜野宿した時、小村峠一円が土地開墾に適した土地と見て、自分の従者彦兵、二左門の両人をこの地にとどめ永住させることに決め、自分は桑原氏の人達と細越に移住し法西となのり。一草庵を建て、教えをひろめた。

その後しばしば小村峠を往来して二人の開墾を助け、また峠の道は当時はほとんど無にひとしかった。小道を一族とともに開き、真宗正依の経典大光無量寿経の弥陀の本願四十八の願にちなんで四十八曲りの道を開いたのが現在の峠の道といわれている。

また払川を過ぎ峠に登りかかる途中の田の中に田村麻呂将軍の「鞍掛（くらかけ）の石」と称するのがある。この石は先祖彦四郎が峠の開墾に細越より往復する時途中馬を休ませて、鞍をおろし、その石に乗せたところより誤り伝えられたものらしい。

（注）有名な小村峠への登り道四十八まがりは、近年開さくされた。（昭和四十六年完成。）自動車新道によって廃道同然となった

大永三年末　信徒の願いによって、野田村の現在土地に移転した。

大正七年　佐原某なる少年の火遊びによって、本堂・庫裡が全焼した。

願竜寺の大石橋

真宗願竜寺は天文元年の建立、寺中に覚照寺、正蓮寺あり、黒姫山道行語に「野田村願竜寺に休もうと思って、その寺にお詣りしたところ、非常に大きな石橋がかけてあり、上も平らである。人々これを見て驚いた。民部郷めずらしく思って肩で長を計ってみたところ、長さ約一丈四尺余り（四・三メートル）巾は九尺（二・七メートル）あったという。」

秋葉山

標高二二五mの秋葉山は火の神である。野田では四月十八日夜、若者が頂上で火をたき酒を飲みながら歌ったり、踊ったりしたという。

なお、終戦前一時監視哨がおかれた場所である。小さな祠がある。

この周辺の山林をきると村に火事があると言伝えられている。

西山と雪崩

鵜川の流れにそって野田の地で見て西に一きわ高く見える山がある。野田から見て西にある山というので通称西山といっている。こ

の山の頂上近くに木の繁茂しない崖がある。その右方は源義経奥州へ逃る途中、馬の足をすべられた処、左方のは弁慶のそれであるといわれている。

この付近より大なだれが度々あったことが言い伝えられている。

今から四百余年前にも大雪崩あり、円梵寺（えんぼんじ）というお寺がおしつぶされたとか。

また百年ばかり前にはそれより更に百五十m～二百mばかり下流の屋敷部落のそばまで来たとか、この時は被害がなかった。

もっとも被害の大きかったのは昭和二年二月十日のものであった。昭和二年二月六日昼は好天気であったが夜に入って雪となった。この日は大正天皇の御大葬の全国民御通夜の日であった。雪はそれより連日連夜降り続き十日には積雪三mを越え、部落間の交通もとだえがちになり、隣家へ行くにも容易なことでなく、各家ともその除雪に困り切っていた。午後三時過、西山一帯に大雪崩が起り一瞬にして屋敷部落はそれに呑み込まれてしまった。全壊五戸、半壊三戸、焼失一戸、死者十九名、牛一頭を出した。（奇跡的に一人は床下の穴に落ちて助かった）

近隣の町村の応援を得て、被害家屋や被害者の掘り出しをおこない十六日、ようやく全部の掘り出しを終った。十六日には雪晴れとなった。

村葬（十九人の）もしめやかに行われた。後に天皇より御内帑金（ごないどきん）も御下賜された。

この大雪崩は山頂より約二Kmは走ったことになる。軽い雪が表面を走るようなものは表層雪崩（ひょうそうなだれ）または「あい」と言って遠くまで走るといわれている。

伝えるところによると四百年前の雪崩の時も円梵寺の大銀杏の下でとまり、昭和二年の大雪崩も新沢郡一氏の銀杏の木の下で止っている。新沢郡一さんはこの銀杏の下の一番積雪の深い下に生き埋めになってなくなっていた。

屋敷部落にはこれら被害者の精霊塔が部落民や近隣の人々の喜捨によって建てられている。

その後西山には雪崩防止のための階段切が各所に切られている。

経　塚

一、杉ノ崎のはずれに小高い塚がある。

昔、ある僧がおいびつをせおってこの地に来り、ここにいた、ぢいさん、ばあさんと暮していたという。死ぬと経本と一しょに埋葬された。「ぢぢ塚、ばば塚」となったという。

経本などを手に入れるため、後の人が堀りかえしてみたが何もなかったという。

今は一mばかりの穴がある。塚の近くには木があり、この木にさわると鈴の音が聞えるという。

二、久米の奥、三ツ子沢へ行くところに塚がある。この中にお経の本があるという。

おかた高橋橋

昔、源平時代に高橋判官の一族が壇ノ浦で敗れ、今の「堀の内」の地に落ちついた。女だったので女方（おんかた）と呼ばれ、これが「お方」のはじまりという。お方は二十四代で衰えたという。

女方は自分の堀の内に橋をかけ、名づけて「高橋ばし」と呼んだ。

（大字田屋）

払川のドス石

田舎（たや→田屋？）に癩人（らいじん）がいた。薬師堂の紫雲の源をたずねてふもとに来たが罪が深いので登ることが出来ないでいた。その時薬師が現れてつげていうには「ここに江水ある、名づけて払川という。お前は罪が深いのでこの悪い病気にかかった。この川に入って五体を洗い清め、罪をざんげすれば癩瘡（らいそう）がすぐなおるであろう」と

癩人はことばを信じて五体を洗い清め、罪をざけげして石の上に坐って薬師をおいのりすること三七日たつと、おかげがあらわれて病気はすっかりなおった。

そこで世間の人が名づけて「度ス石」というようになった。

ドスが窪

谷根と坂又との境界付近を昔から「境」といっていた。ここには広い畑もあった。境界には神明様をおまつりしたほこらもあり、往き来する人の信仰のところでもあった。

神明様から坂又よりに四〇〇mばかり北側の山腹に広さ一haばかりの平地がある。この付近を「ドスが窪」といっている。その昔ここに癩患者（らいかんじゃ）が行き倒れたとのことで名づけられたとも、また「ドス（癩）」にかかった人達を集めたとも伝えられている。

神明様とドスが窪の中間の峰には明治戊辰の役の際に、いわゆる官軍の柏崎攻めの迂回路にあたり、この方面のまもりとしてここに砲座が築かれたとか、その壕のあとが残っている。

田屋村と石塚

人皇四十三代元明天皇の和銅五年のころ、能登の国の臥行者（がきょうじゃ）という行者が諸国をまわった折、この郷に田舎（たや）があるを見て田舎（田屋）村と名づけたという。

ある家の前で歎き悲しんで泣いているのをきき、臥行者が立寄って見ると罪人（ざいにん）がいた。見れば阿鼻地獄（あびじごく）のように地獄のせめ苦にくるしんでいる。行者が罪人にその訳をき

くと、罪人は「自分は、こざかしくも法華経の悪口を言ったのでこの苦しみを受けている。どうぞ法華経を書写し下さるなら、私はこの苦しみからのがれることができるでありましょう」と行者これを承知して、小石を集め一石一字の法華経を書して塚となした。罪人は喜んでお陰で地獄からのがれることができたという。

これから地名を石塚というようになった。

円梵寺の由来

弘治元年柏崎日向守勝長甲斐合戦の時お祈りしたところ、みんなしとげられたので、お堂を建て石塚山薬王院円梵寺と名づけた。寺に土地を与え尼僧を集め二六時中のお勤めを続けた。

その後悲しいことに、この国の真言宗がダメになった時伽藍（がらん）が焼け、寺の土地もなくなり、今は田んぼとなって小さな堂ばかりが残っている。

しかし、ご本尊さんのごりやくは昔も今もかわらず続いておるという。

番屋（屋号）

石塚の県道小千谷柿崎線の道側に番屋という家がある。

北国街道を柿崎から下越へ向う海岸線が表街道というならば、米山南麓を黒川ぞいに小村峠を通り下越へ行くこの道は裏街であった。小村峠の往き来の人をあらためた番所の跡といわれている。

（注）鵜川では地名となって残っている。

地蔵岩

臥行者という行者、石塚の近くに医王在中という、かすかな音をきき、不思議に思って石を打ち割ってみると薬師如来の石像が出て来た。住吉神明が現われ行者につげて言うには、「汝（なんじ）この峰に一宇（いちう）の堂をつくって薬師を安置し里民をまもれ」と、行者この言いつけを守って、堂を建て、草を採って、華髪曼（けまん）とし甲番を塗香とし出水を求めて花水とし、薬師法を修したので紫雲たなびき堂屋敷四方をおおた。

祓川薬師如来の縁起

そもそも、ここ、姥薬師（うばやくし）の由来をたずねると、人皇四十三代（元明天皇）和銅五年泰澄禅師霊夢（れいむ）があって五輪山に登っておこもりしたところ、生身の薬師如来をおがむことができた。しかし普通の俗人にはこれをおがむことができない。禅師は深くこれを悲しんで尊像（そんぞう）を彫刻して、末代（まつだい）まで残念そうと思われたところ、不思議なことに岩やのあたりに光がさしている。そこで行って見たところ、一つの石があって、二十五センチ角位でるり色に光りかがやいている。禅師がいわ

れるには「自分の願いはもう満足した」、そこでみずから彫刻して仏像をお作りになった。そこで人々はこれを山の上に背負って上ろうとしたところ、大盤石（だいばんじゃく）のようで動かすことができない。禅師もお心を苦しめられた。そこへ白髪（はくはつ）の女がひとり来て言うには「自分は五障三従（ごしょうさんじゅう）の身であるから、み空のみねの霊場（れいじょう）に行くことができない。願わくば尊像をここにおとどめし、これから先々女の人をおめぐみ下さい。」というなり、たちまち消えてなくなってしまった。人々は不思議に思った。そこで禅師はこの地をえらんで尊像をお移ししたところ、前と同じようにすらすらと運ばれた。それから姥薬師といい、ここを尸羅場（しらば）と名づけた。

その後雪が積ったり、岩が欠けたり、岸が崩れたりして、尊像が谷底に沈んでしまった。その後、幾十年かたった。ある時、ふもとの某が不思議な夢を見てそこをたずねて見たところ千尋（せんじん）の底に光りかがやくものがあり、半分は泥の中に埋っている。某は有難涙を流しながらその仏さんをせおって、ふもとにおりて、小さな庵（いおり）をたてておまつりした。

また、ある時夢にいうには、このそばの谷水で身を清める者は、心も体もきれいになって、けがれがはれる。そこでこの谷川を祓川（はらいがわ）というようになった。

それで、どんな重い病気でもこの水で薬をにるときは、ききめはすばらしいものがある。

姥薬師と風祭り

払川の水上にあり、―払川の姥薬師堂瑠璃殿という―

米山のウバ薬師堂とて石仏にて霊験あらたか、一農夢じらせにて「六月土用丑の日に漆の葉をとり煎じその汁にて醴酒―あま酒―をつくり飲めばかぜをひかない」とそれより年々風祭りと名づけ、醴酒を作り、村中農事を休む。

芳が沢

文化三年のころ、柏崎日向守殿の伯母芳という者、地蔵岩の尊像に帰依（きえ）して五年の間日詣りの念願を続けたところ、願がみんなとげられた。そこで俗に「伯母薬師と名がつけられた。姥の住んでいたところを「芳ケ沢」と名づけたのはこのせいである。

千束平のそば車

西山の谷根よりの高い尾根を行くとそこに雨池があり広場がある。ここを千束平といっている。

昔、惣兵エという百姓がここに行って「そば」を作った。そばが

大変よくみのったのでとり入れに行った。そばを刈り取ってせおって山を下りようとしたがなかなか困難なので大きく束ねて車のようにして山の斜面を転がし落した。百姓はこれはうまく行ったと思って下へ来て見るとそばは途中で落ちてしまって実は一粒もなかったという。

そこから「そけたらそうべいのそば車」という俚諺が生まれた。

山ハゲと地蔵岩

村の北にあたり、米山につづきたる山なり。九合目に凡そ五、六百歩の平地があって、池があり夏の炎天にも水が干あがらない。その上地蔵の形をした天然の石仏がある。

（注）・山ハゲ―山ぬけして木の生えないところ

・普通に天池（あまいけ）といい、この頂上付近に数ケ所あり

・天然の石仏―地蔵岩といわれている。

清二郎滝

米山登山道（昔の登山道）の一ノ坂の脇に深い谷があり、そこには滝がある。この付近にはぜんまいが沢山出る。山菜取りの人がよく行くところである。昔、清二郎という人がぜんまい取りに行って、ここで深い谷にすべり落ちて死んだということである。そこからこを清二郎滝という。

尼が石になった話

米山の何合目かに来るとそれ以上女の人が登れないというところがあった。ある尼が「私は女だけれども頭を剃っているから女ではない」と言って山を登ったところ、谷に転げ落ちて石になってしまった。その谷底には今でも女の形そのままの尼の石が残っているという。

ぶどう窪の黄金のひしゃく

野田から米山へ登ると、頂上近くにぶとう窪という窪地があって、そこには、いつも清水がこんこんとわいていた。登山者は、この清水でのどをうるおして、元気をとりもどして米山に登るのだった。麓の村に、足の悪い老人がいた。米山の頂上の薬師様にお願いして、病気を治してもらおうと、米山に登って来たが、ぶどう窪に着いたら、足がなまりのように重くなって、もう一足も足を前に出す事ができなくなった。

ふと見ると、ぶどう窪の清水のそばに、キラキラ光る黄金のひしゃくがおいてあった。驚きと好奇心で、その黄金のひしゃくで、清水をすくって飲んだら、たちまちすがすがしい気分になり、足も鹿の

足のように軽くなり、一気に頂上をきわめる事ができた。帰りにぶどう窪にたちよったが、黄金のひしゃくはどこにも見当らなかったという。

花栄寺と北条毛利家

花栄寺縁起文によると

天喜年中のころ（十一世紀中葉）源義家が奥州地方へ行く時、米山参詣された。途中山谷に霊水（れいすい）があったので休まれたところ、鶏の声がした。供の人に尋ねられたところ、供の人は「近くに小庵（しょうあん）があり、本尊は行基菩薩（ぎょうぎぼさつ）の作られた、聖観音（しょうかんのん）であります」といった。それで一夜とまり、鶏が鳴いたというので「鶏谷山（けいこくさん）」と書き住僧に渡された。この寺が竜沢寺と言っていたので、これから「鶏谷山竜沢寺」と呼ぶようになった。

しかし、その後衰え、第百五代後柏原天皇の永正十癸酉年（一五一三年）に北条城主十一代毛利丹後の守高広の母花陰正栄大姉が菩提（ぼだい）のため再建された。そしてこの時から「鶏谷山花陰寺」と変った。永禄十丁卯年（一五六七年）お寺の建物が焼け、また花陰寺は音義（漢字の音と意味）が悪いというので、貞亨元申子年（一六八四年）法名の栄の字をとり「花栄寺」に変えたという。

このように開山、曇芳文誉大和尚からして十七代永正十癸酉年から文化元年（一八〇四年）まで二百九十二年続いて来ている。

（注）これは文化元年に寺社御役所に提出した由緒書である。

花栄寺は現在大字木沢字寺田にあるが、古老の話によれば大字田屋字杉之崎にあったという。又その次には字坂又にあったという。

（注）その話を裏づけるように代代寺の世話役であった大門という村山伏の墓地が坂又と木沢の両所にある。

湯　元

木沢の沢に鉱泉がある。この湯元から竹で水を引き入れ、山から帰える人を入れていた。いまも「湯」という家の名は残っている。

薬効は「リウマチ」にきくということで、ここに湯治してなおった人も多いという。今は「湯や」はやっていない。

八間石

木沢の沢というところに、八間（十四m）もある木石があり、石の下の大穴に大蛇が住んでいたという。この付近は「木沢みかげ石」の産地であり、昔から石臼の材料として掘り出されていた。

昔、部落の老人が大雨後にここに来ると、長さ三m、胴は一升樽（たる）位の大蛇がいるのを見て、そのために一月も床についてねたという。この八間石は今は大部分土中に埋り地上約三㎡とかいわれている。

花栄寺境内の六地蔵さんの石、高さ一丈八尺五寸（約五・五m）巾一丈二尺（約三・六m）厚さ一尺八寸（約六十cm）前石長さ一丈

四尺（四・二m）巾五尺八寸（一・八m）十八世賢竜和尚の建立といわれる。

願竜寺の大門の大石橋の石、共に木沢の沢から出たものとか。

菅　家（天神様）

菅家筆法第二十六世、菅原道日徳という人、人よんで天神様といわれた人である。その人が書かれた書や画を見ると、天保四年癸巳歳七十五童と記されたものが沢山あり、また七十四童と書かれたものも少くない。

しかしながら天保四・五年ころ七十四・五歳の御老体でこの地に回って来られ当時（花栄寺）を宿所と定めて、御筆を振われたというが、どうしてこのような高貴な方がこの辺土（へんど）においでになったのか……

天神様の御書きになった木沢神社の幟（のぼり）の大旗は現在もあり、春秋二回の祭典にはかかげている。

この大旗を掲げる時は必ず雨が降ってくるとさえ言われている。越後内にはこのほかに二筋（りゅう）あるだけといわれている。

称名寺由緒

建久三年の頃、法然上人（浄土宗開祖）の弟子（でし）熊谷蓮生坊（くまがいれんせいぼう）が北国遍歴（へんれき）の途中、信州善光寺にお参りしたのち、この地方に行脚（あんぎゃ）して来て、一けんの堂に泊めてくれと頼んだ。この時堂の西欣という坊さんはこれを厚くもてなして、熊谷上人の教えを受けたと伝えられている。

この堂宇（どうう）はそのころは真言宗（しんごんしゅう）に属し、摂取院（せっしゅいん）といって、現在の中山峠の入口の漆畑（うるしばたけ）のあたりにあって、みすぼらしい草ぶきの庵（いおり）であった。住僧の西欣は真言宗の僧であったが、熊谷蓮生坊がこの寺に泊っている間に、そのころ都でひろく栄え盛んになっていた浄土宗の教えを受けて、深く信じるようになった。

熊谷蓮生坊は雪に降りこめられたので、長くこの寺にとどまったが、再び行脚（あんぎゃ）の旅に出るにあたって、名残（なごり）をおしむ西欣に対して、持っていたところの師僧（しそう―先生―）法然上人（ほうねんしょうにん）自筆の名号（みょうごう）（南無阿弥陀仏）と自分の行脚の姿を刻（きざ）んだ自作と持っていた鉄鉢（てっぱつ）の三品を与えて去ったという。

西欣はこれを大切にして伝え、、代々寺宝（じほう）として現在にいたっている。

その後、称誉満海（しょうよまんかい）上人が文正元年堂宇（どうう）を建て（現在の境内北方大銀杏付近）寺宝として伝えられている名号の因縁によって正式に浄土宗に所属、京都知恩院（ちおんいん）―浄土宗総本山―より称名寺の寺号をいただいて真言宗より浄土宗に改宗し、「熊谷山摂取院称名寺」を創立、称名寺第一世となった。

それからのち代々に伝わって約五百年、現住職五十嵐祐教氏は第二十八世に当っている。

にざんば

熊谷にある家の名

この家の裏に小川が流れている。今は橋があり、道も立派になっているが昔、道路もせまく、橋もなかったころ、人々は荷物をもって渡ることが出来ないので、荷物を向う岸へ投げ着物もぬいで裸になって渡ったとか。

荷物を一時、手からはなし投げるために散らばるので荷散場という名がついたのだとか。

中山漆畑

朱雀天皇（すざくてんのう）のころ、中山漆畑（なかやまうるしばたけ）に沼次郎正教（ぬまじろうまさのり）という豪農（ごうのう）があり、近くに池があった。沼次郎は頭が悪い上に、みだらな心が強かった。このことを知って池の主（ぬし）の蛇が美人に化けて、毎夜のように正教のところにやって来た。その化けた女が言うには「自分は都で生まれたものですが、あなたに前から恋をしております。私をあわれと思って下さったら、どうぞ都へ連れて行って下さい。」と言った。

正教はこの言葉を信じて夫婦になる約束をして女を連れて出かけようとした時、今まで日が照っていたのに急に暗くなって、一足も歩くことができなくなってしまった。

正教がどうしてよいかわからず、困っていたところ、二十二社権現（ごんげん）があらわれて、正教をつかまえて、矢をいるように投げとばした。（そこを今「とびかえり」と言っている）

正教はきもをつぶして、立ち上ったところ、数百ぴきのかにが集ってきて、その蛇の女をこなごなに、はさみで切って、たいじしてしまった。 ―そこでここをかにさわという― その時、不動尊（ふどうそん）があらわれて、沼次郎につげていうには、「なんじは蛇と夫婦になったから、体にうろこができてしまった。滝に入って体も心も洗い清め、罪（つみ）をおわびして、もとの体になれ」といった。沼次郎はそれではと、滝に入って不動明王のお経をとなえること、三、七、二十一日となった。ごりやくがあらわれて、不動尊が滝の上に現れ、御袈裟（おけさ）をとって、授けられた。正教は喜んで着たところ、うろこはすっかり消えてしまった。そのところを「滝の入」という。

また、袈裟をおさめるところにお堂を建て、不動明王を安置し、お祈りに一生けんめいはげんだので、本尊さんがつげていうには「なんじは弥陀（みだ）の名号を百万遍（ひゃくまんべん）となえれば、すばらしいものになるであろう」と言った。沼次郎は喜んで山に入って、言われた通りにお経をよんだ。のどがかわいて、とうとう声が出なくなった。すると不思議や弥陀のおかげで急に清水がわき出した。そこでその清水を「念仏清水」と名づけた。あみださんが堂の前にあらわれて、あたりいっぱいに光りかがやいた。正教はこれはあらたかな、ほとけさんであると喜んで弥陀三経（みださんぎょう）をおあげしようと思ったが、頭が悪いのでお経をよむこと

ができない、何とかしてお経を習おうと心をくだいている時、正治元年管秀方敦茂がこの国へ来た時に、小さな沢があり、梅の木が多く茂っていたので「梅沢」と名をつけ、この梅の木で一夜の宿をとった。美しい春の夜であったので「花や今宵（こよい）のあるじなり」と書いた。

沼次郎は、これを聞いて、お目にかかり、三経をいただいた。その時菅丞相（かんじょうしょう）の亡霊（ぼうれい）が現われ、秀方につげていうには、「お前が象の入った、ほりもののある社殿（しゃでん）をつくれば、この村の者はみな学問ができるようになるであろう」と言った。そこで、沼次郎は言われるとおりの社殿をつくった。

沼次郎には一人の姫があって、名前を「朝姫」といった。その上男の子が生れたので「梅沢五郎敦則」と名づけた。そして、おやしろを建てかえ、あつくお祭りをつづけた。

元治元年宇佐駿河守（うさみするがのかみ）がこの神社を信仰して「梅沢坊」と名をつけて、社領（しゃりょう）を下さった。たくさんの人々があつまって、国家鎮護（こっかちんご）のお祈りをした。後に悲しいことにこの国に戦いが起り、もえてしまった。もえた後、また社を建てお祭りが続けられ、この神を信心すれば、習字がじょうずになると言伝えがある。

建物が所々に移ったが今でも、「称名寺」という地名が残っている。

おおえぬ（狼）沢

野田と鵜川の境は昔は荒地で狼（おおかみ）の遊び場だったという。

狼のことを「おおえぬ」または「おおえん」と言ったのでこの地名が出来た。

弘法大師の霊泉

苛島の南部の追立越道路側にある清泉

伝説によれば弘法大師諸国巡行の途中、鉱泉のある家に一夜の宿を願ったが聞き入れられなかったので、近くの山裾（やますそ）で一夜を送られたという。その地で大師が杖でつかれた時、湧き出た清水が今なお、こんこんとして止まず、道行く人ののどをうるおしている。

石仏（いしぼとけ）（一）

宮川新田より清水谷に通ずる道路脇の地界付近に地蔵さんがある。地蔵さんの斜め傷あとは昔つけられた刀傷だと言伝えられている。

この地蔵さんの信仰ごりやくは遠く魚沼地方にも知れ渡って、願がかなった時は椀（わん）の真中に穴をあけてつるす。碁石を自分

の年だけ拾ってあげるならわしになっている。

設立年代は不詳

現在の小屋は清水谷の曾田惣右エ門氏が耳病により悩まれた折、願がかなって寄進設立されたものである。

初回、再建と当家二代にわたり受けつがれて現在にいたっている。

石仏（いしぼとけ）（二）

昔、耳の遠い旅人が地蔵の前に腰をおろして休んでいたところ、おいはぎが現われ、金を奪おうとしたが金目のものがないとわかると、旅人に向って刀を振りかざした。とっさに地蔵の後に隠れた旅人は無事助かったが地蔵には刀傷がついていた。

以後この地蔵は耳の神様といわれ、人々は耳がなおった時は小石を自分の年の数だけ持って行き、木の椀に穴をあけ、それに糸を通して地蔵にかけておいた。

そこには大願成就と書かれた旗が掲げられ、木の椀は今でも地蔵のまわりに転っているということである。

石仏（いしぼとけ）（三）

宮川新田の作場が終り清水谷地内に入ると右手に小高い丘があり六尺（一・八メートル）四方程の祠が建てられてある。中に祀られている石仏は高さ六尺程の先のとがった自然石で真中が二つにわれている。

昔、侍が真夜中清水谷に向って歩いていたところ、杉の根方に泣き叫ぶ赤ん坊を抱いている母親が、これも悲しそうに泣いていた。真夜中にもかかわらず親子の着ているしま模様まではっきり見えた。そこで侍は不思議に思い何か魔物の仕業に違いないと思って刀でき りつけて、そのままそこを立去った。村に八右エ門というぢいさんが耳を病んで毎日毎夜苦しんでいたところ夢知らせがあり「杉の根方に狐の親子が侍に殺されて石になっているからそれを祀ってくれればお前の耳をなおしてくれる」といわれた。

さっそく、そこにかけつけて見たら夢と同じに大小の石がころがっていた。ぢいさんはさっそくその石を祀った。そうしたらぢいさんの耳はたちまち直った。今から四・五十年前、惣右エ門宅の年寄りが耳を悪くして、それを信心してなおしてもらったのでそのお礼に祠を建てたとのこと、祠の前に杉の古木があり、信心して直った人は自分の年の数だけ小石をあげ、木の椀に糸を通してお礼まいりをするのだそうである。前に積まれた石の量から推して随分村人以外の人にも信仰されたあらたかな石仏である。

○苔むせる石の仏に名はなくも
　耳いやすべき功徳ありせば
（故大図菊蔵氏作）

宮川新田

宮川新田は元、熊谷原といって広い原っぱであったが元禄十三年

柏崎の宮川四郎兵衛が当時の甚右エ門という者と共にこの地を見立て開墾した。そこで宮川新田と名がつけられた。

権観音（五観音）

明石平の筋向い（清谷分校が鵜川の分校だったころの通学道路）に権観音という地名の所がある。この地の伝説は淵から五体の観音さまが上り中一体は清水谷へ他は各地に安置されているとか、また他説では柳の木で作った観音像五体がここから出たのであるといわれている。

清水谷に祠られた一体は昭和十七年の大火にお堂が焼け一時熊谷の称名寺に預ってもらっていたが、その後女谷布施実さんから邸の天神堂を寄付してもらい、もとの場所にそれを建て観音様も修理されてそこに移し祀られている。

一説には、清水谷ではこの淵に死んだ馬をすて、そのたびに観音像を彫刻してここにたて馬のめい福をいのった。その観音像いつの間にか五体になり、人々は五観音とよぶようになった。

丹蔵柿（清水谷）

木石エ門宅の裏に円蔵柿といわれた柿の木があったが今は切られてしまった。昔、円蔵という浪人が来て太兵エへ押しむこに入っていた。素性もわからず荒々しいならず者で、村人からいみきらわれていた。

ある夜、村の若い衆はこらしめのため酒を飲ませて、酔ってたけり立っているところを三間（五・四メートル）ばしごでたたきつけ足に縄をつけて引きずり廻したがなかなか降参せずとうとう殺してしまった。そして死体は大橋の川の縁へ持って行って埋め大水の時流そうという計画だった。その殺した場所に植えたのを円蔵柿と村人は呼んでいた。

またたび清水

清水谷の奥にまたたびの木があって、比類のない大木である。その傍より清水がとうとうと湧き出ているこれを「またたび清水」という。

国中無比の良水で一升の掛目四百十匁（一五三七瓦）あるという。上杉家春日山に在城の時はお茶の水として月三回汲みに来たという。

日久しく貯えて水質が変らないので海上の回船の用水としていた。白川風土記に、黒姫山の神様の御手洗「一升のでつぼ」といい、一升ますのような水つぼ二ケ所よりでる水をまたたび清水という。

渡戸の沢（蛇淵）

栃倉川の上流で石原畑と雨池の所で深い深い沢になっている。村

人は「蛇になれボコボコ」とか蛇淵とか呼んでいる。淵の両側の木もえのき、もみぢなどの古木が生え茂り、その木を切ればたたりがあるといわれている。その沢の中の岩の上に足駄（あしだ）の歯跡がついている。昔、野田の神官山城の守が歩いた跡だといわれている。ある年その山城の守が供を連れて姫ケ倉のお祭に祓い（はらい）に行かれた。七月十五日が祭り日である。帰りにあんまり暑いので蛇淵の真上の樹の上で昼寝をした供がふと目をさますと神官の姿が見えない。あたりを見回すと淵の上に覆いかぶさるように生え茂っているえのきの上に胴から上は神官だったが腰から下は大蛇になって下をのぞき込んでいた。供は驚いて寝たふりをしていたら、神官が来て家に帰ろうといわれ、こわごわついて帰った。間もなくその神官は急死した。

それからは七月十五日にはその沢には濃い霧がかかって全然下が見えないそうである。

家人は神官は蛇淵に帰られたのだろうと思っている。またこの沢のえのきの根元に凄い大蛇を見かけるといわれ、だれもその沢に降りるものは一人もない。この沢一体を「渡戸の沢」といい、淵を「蛇になれボコボコ」と呼んでいる。

回谷峠

久米谷（久米、水上、細越）と鵜川岸地域（野田、佐水）を結ぶ関門が回谷（まわりだに）峠で、峠道は佐水山の山すそをぐるぐる回っていた。

いつのころだったか、佐水の若衆宿をしていた孫三郎ぢいさんが、ある日馬で菓子や飴（あめ）の行商を終って、日暮れ時この峠にさしかかると、見なれぬあきんどらしい人が登ってくるのに出会った。そしてこのあきんどの持っていた、たくさんの天草と自分の持っていた売れ残りの菓子や飴と交換して、うまくやったと意気揚々と家に帰った。

夕飯をたべながらばあさんに「おら、きょうは大もうけをした、あんな根性のいい、あきんどなんて生れて初めてだ」と得意気に峠での話をし、やおら菓子箱を引き寄せて、中を見ると、どうだろう箱の中にはコケラ（苔）がはいっていた。

弁慶投石

弁慶十三才の時、わが力をためそうと、八石山に登り、百二十キロもある巨石をもちあげて、久米谷にむかって、はっしとなげた。石は空をきって、廻り谷峠に、地ひびきたてて落ちた。その石には弁慶の指のあとがあるとか言われ、弁慶投石と言われている。八石山には、弁慶が石を持ちあげてふんばったという足あと石が、あったということである。

細越村（端村 田代新田）

◎刈羽郡鵜川庄上条郷

柏崎陣屋の巽（たつみ―東南）の方、みちのりは二里十八丁（約十Km）にあり、永正年中、上杉の家来毛利丹後守（かんがえるに毛利家世々丹後守と名乗っていた。これは永正十年に死んだ高広であろう。毛利系北条村にくわしい。）の家臣、細越監物、その子大口大膳太夫、別俣郷久米谷、野田、田屋、木沢、山の内外両谷を賜（たまわ）り在城していた。大膳太夫天正元年、春日山へ引移りあき城となった。城主の老母、大膳太夫が弟太左エ門と共に当村に残り山崎という処に住んでいた。同六年検地があった時、監物の由緒により細越村と名づけ、家数三軒にて、深田大野地を切越し開発した。

太左エ門の子孫、同じ庄敷役を勤めた。領令堀家以後城川原村にも同じこと。

村は長さ東西七十間余（百二十八m）、南北百三十間（一一四五m）戸数四十二軒、四至は東に水上村へ六丁、地界は入交り、西は野田村へ七丁、渓水の落合を地界としている。南は黒姫山がそびえ地界十六丁ばかり、北は佐水村へ十二丁、山道の続きで境界は、はっきりしない。

◎田代新田

細越村の南六丁、山沢の間にあり細越より田代某という者、見立て開発した地という。年代はわからない。前々より無民家にて、細越村より来た。

細越城跡

古城跡は別俣郷の中央にそばだつ山脈の頂にある。山口、野田方面から望むときは墨壁（るいへき）の形は絵にかいたように見事である。東のふもと細越より上り口に松尾神社があり、それから道は甚だけんそで木が生えしげってふみわけて登る足がかりがない。十数町で山頂に達する所に、むかしの馬場跡がある。その南にそばだち、やや平らな処を本丸跡、また南の方を二之丸跡といっている。上条、別俣両郷村落をみな指さすことができる。

城主は数種の古城録に細越将監としるしてある。そうして、一つもその名字を記したものがない。その家数代にわたり皆将監という名を名のったものであろう。

細越氏が滅亡する時、金の茶釜を埋めたという風評がたち、村人が幾日も城あとを掘り返したが、何も出なかった。

佐渡から細越を望むと、白椿の葉が、きらきら黄金色に輝いて見えると言われ

佐渡の金山、　黒姫見れば
金のなる木は、たくさんあれど
いまだ若くて、掘りそめぬ

という民謡が歌われているという。

はりたや坊さん

昔、一人の生国のわからない僧が細越に来た。その僧は大変良い男で、はりたやが上手なので村の人達は「はりたやが上手なので村の人達は「はりたや坊さん」と言っていた。そして長いこと村に住んでいたが、坊さんがあまり美男なので、村の若い女衆の人気の的

になっていた。そのため男衆が腹をたてて、打ち殺してしまい、死体を裏山に埋めたという。しかし人家に近いので村から五百m位離れた「野ぶろ」という所に埋めなおしたという。

年代を記した石の墓が今でも杉林の中にあるが苔が深く字を読むことが出来ない。

石どう墓

昔、「ろくぶ」というお札を持ったお坊さんがこの村にやって来た。どこか遠い所から来たとみえて、村に入るとまもなく倒れてしまった。村の人達は、どこのだれやらわからなかったが、ほうっておけば死にそうなので家に運び手あつく看病した。その人がすっかりよくなり、二・三ケ月すると村に伝染病が流行したが、その坊さんの持っていたお札で病がどんどんなおった。

村人たちはとても喜んでいた。しかし坊さんもやがて死んだので、村人達は墓を建て、毎年七月二十四日には「ローソク」を立ててお参りするのだそうだ。

こんなわけで前向の部落を「石どう原」と今だに呼んでいる人もあるという。（久米）

五位野家の太刀

久米の五位野家は五位野勝重の子孫である。

家記によると刈羽郡鵜川庄久米有武村五位与左衛門の先祖勝重は信濃国の人、木曾四郎兼遠の嫡男で族兄の源義仲につかえ、平家追討に功があり、五位尉に叙せられ、雅楽之助に任ぜられた。

伝来の太刀は県指定文化財である。作者は備中弘次で本朝鍛冶考にのっている名刀である。

この太刀についての伝説。妙高山で火をふく大蛇が出てみんな困っている時五位勝重が太刀、槍、巻物をもって出かけ、大蛇を打ち殺したという。

妙高山頂に堂があり、本尊は木曾義仲の護念仏といわれ、寺の用材はすべて、久米から運んだという。弥陀開帳の役は五位野家であり。先祖は義仲山上の先達をしたといわれている。

久米の鉱泉

今から四〇〇年ばかり前には「湯の崎屋」という宿屋があり、地下から出る二十三度の鉱泉をわかして湯治場としていた。最盛期には芸者が二人もいたという。

「まむし」の毒、「あせも」に薬効があり、湯治場としてにぎわった。

久米の庚申塔

庚申像と言えば皆手が六本あるというのに別俣久米の不伝院の境

内に五本の手の庚申塔がある。

昔、久米の老人が集って庚申講を作っていたがある年、庚申塔を建てようと石屋を呼んで「庚申像は手をぬいてもいいから早く彫ってくれ」と頼んだ。手をぬいてもいいと言うのは、余りていねいでなくていいからという地方語であったが石屋は手を一本少なく彫ってしまった。講の者はこれを見て、

「とんでもない事だ、手が一本足らんじゃないか」と石屋に文句を言った。石屋は

「手をぬいてもよいという頼みじゃないか、あなた方の頼みによって手を一本少なくしたのだ」と言った。

講中の者は五本手の庚申像もまた面白いじゃないかと、そのまま不伝院の境内に建てたという。

久米村

○久米村の名の起りは神社の条にくわしくある。万治のころまでは久米谷湯府（ゆたま）村といっていた。湯谷という当村八幡の北山のふもとに昔温泉が湧き出ていたが、その後水に変ったか今も硫黄の気を帯びている。昔は里見大膳亮義益（さとみだいぜんのすけ、よします）の領地。貞治のころから上杉左近将監憲栄（うえすぎさこんしょうげん）の領地となった。

同郡北条村の毛利丹後守の臣、石口大膳太夫の領分であった。

上杉景勝会津へ転封の後、領主の次第：：城川原村に同じ

○三ツ子沢

三ツ子沢、本村より丑寅（東北）の方二丁にあり、村の長さ六十間、戸数十五軒

六部塚

諸国を巡って来た六部が穴を掘って中に入り、柿を食いながら鉦（かね）をたたき、行をしたという。穴から出たか、中で死んだかわからないが、今小高い山になっている。

明見城と庵入城

清水谷に明見城跡がある。明見城は鶏鳴城又は里見城と言って、新田氏の族里見義益が築城したと伝えられている。

義益は又別俣水上に、庵入城と称する隠居城を築いたとも言われている。

義益は、後仏門に帰依して、大光寺中興の大檀越となった。

同寺には、里見義益夫妻の霊牌がある。

大光寺の文福茶釜

寺に古くから使い伝わっている、古い形の茶釜がある。

その昔、里見氏の臣高野吉十郎という人が武士をすてて、部落に

止って百姓をいとなんでいた。大光寺の壇家であった。この家に代々伝っていた茶釜がある時「大光寺へ行きたい」といいながら、ごろごろと転げ出して大光寺へ転げて行ってしまった。

（注）この茶釜は造り方が普通のものと少し変っていて、三本の脚の一本が口の真下についている。

水上の長者屋敷

水上の東端、約百間（一八〇m）隣村石曾根（南鯖石）村境の山嶺に平坦地約二町歩（二ha）ほどある。（長者屋敷か）かたわらに「長者清水」がある。

また屋敷山、下道のかたわらに長者足洗井戸というところがある。

昔、里見氏の家臣穂積某という長者がおったところだという。

この辺人呼んで法仏という。百塚もあり、長者の築いたものといわれている。

○小金清水…お梅井戸（継母、お梅を井戸に落して殺したと）

十二（屋号のこと）

水上に家号が十二という家がある。

昔、十二神社をお祀りしていた神社の氏子総代か神主かの子孫であろう。今は熊野神社に合祀されてその跡はなくなっているが、十二神社の「十二」が家号として今に残っている。

（注）このようなことは方々に見られる。

おんめ清水（一）

水上山に長者が住んでいた。それに「おんめ」という下女がいて、水汲みやせんたくをしていたが、あまりつらいので逃げようと思っているうちに井戸へ落ちて死んだという。そこでその井戸（清水）を「おんめ清水」といい、その後長者は没落していったという。

その後一年余りたってから、坂又の神主さんの夢に「坂又におんめが行きたい」と知らせがあったという。

それで坂又の「よこまくら山」の入口にまつり、そこの水を飲むと病気がなおったという。昔は他村からも来たらしいが今はだれも来ない。

お梅清水（二）

昔、水上の山に長者が住んでいた。この長者には二人のむすこがいた。家にはたくさんの召使いがおり、その中にお梅という美しい娘がいた。お梅は顔かたちが美しいばかりでなく、心根もやさしく、かげひなたなくよく働くので、だれからも愛された。

長者の主人はこの召使いのお梅をゆくゆくは兄の嫁にして、家を継がせようと心に決めていた。兄もお梅を好きであったので行末を楽しみにしておった。ところがこのお梅に対して弟もひそかに恋しており、父や兄の様子から、好きな女お梅がこのままでは兄のもの

になってしまうことをおそれ、何とかして、お梅を自分のものとしたいものと思いをめぐらしておった。結局、兄がいなければ愛するお梅もこの長者の財産もそっくり自分のものとなる。何とかして兄をなきものにしようというおそろしいたくらみをめぐらすに至った。

ある日、兄弟そろって黒姫山へ狩りに出かけた。え物を追いながら二人は黒姫山でも、一番危いところといわれている岩屋のところへやってきた。下は目もくらむような千じんの谷、ここへ落ちたが最後助かった者はないといわれているおそろしい難所である。弟は「よし、今日こそ、うらみの深い兄をなきものにする、またとない機会だ。やっつけてしまおう。」と、いなり兄を谷底へつき落してしまった。

おそろしい殺人をしながら、弟は何くわぬ顔で家に帰り、兄が誤って岩屋の谷へ落ちたと泣きながら知らせた。長者の家は上を下への大さわぎ、家中のなげきも空しく、兄はこの世にもどって来ない。泣く泣く葬式を出し、あとつぎは仕方なく、当然弟にまわった。お梅も心ならずも弟の嫁となった。

さて話は変って、岩屋の谷底に落ちた兄は、普通なら、とうに死んでしまうはずのところ、奇蹟的に谷の底にやわらかい土があったため、大したけがもなく一たんは気絶したものの、気がついた。谷底は深く、暗く、けわしくて上へ上ることができない。肉親の兄を殺そうとした弟へのうらみとにくしみで、一気に飛んで行って弟を殺してやりたい思いであるがどうすることもできない。悲嘆にくれていたところ、足もとに一本の藤の芽が生えていた。この藤が何年かの間にどんどん成長して、とうとう岩屋の上までのび、これにつたわって岩屋の上に出ることができた。

兄はうらみ重なる弟に、うらみを果すため、旅人に身をやつして、長者になりすましている弟の家をたずね、苦心さんたんの末、弟を殺してうらみを果した。このことを知ったお梅はなげき悲しんだが今はどうすることもできず、兄も目的を果していづこともなく身をかくしてしまった。

お梅は長者の財宝を隠そうと思い下の山に九十九の塚を作らせ、そのどれかの塚の中にこっそりとかくした。奉公人にはそれぞれ金品を与え、家に火を放って自分は井戸に身を投じて一生を終った。

その後、この山の清水は真夏でもかれることがなく、また悪病によくきくといういいつたえが残り、この清水を「お梅清水」と名づけられた。悲しい物語りを秘めて今も、お梅清水は水上はもちろん、遠く柏崎方面からもこの水をもらいに来る人が絶えないという。

（注）鈴木信雄氏伝承、三宮勉氏筆

熊野権現

水上に熊野権現がある。

ある年、信心深い老人が、黒姫山に参拝せんと思って、熊谷までやって来たが、疲れきって、一足も足が進まなかった。

その時、雑木をわけて熊が現われ、驚天する老人の傍に来て「乗れ」というように、背を出した。「かたじけなし」とその老人は、熊の背に乗り、無事参拝をすませた。

帰途も熊の背に乗って来たが、水上に来るとふっと熊が消えてしまった。

「これは日頃信心する熊野権現がお助けくださったにちがいない」と、老人はそこに石祠をたてて、厚くお礼申しあげた。今の熊野神社はこうした伝説をもっている。又、熊があらわれた所を、熊谷というようになったという。